

---

# 永遠のメリーゴーランド（ミコと芦田さんの場合）

alice

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

永遠のメリーゴーランド（ミコと芦田さんの場合）

### 【Nコード】

N3380Z

### 【作者名】

alice

### 【あらすじ】

凧ちゃんが女の子として生活を始めてはじめてできた友達ミコちゃん、そしてそんな彼女と芦田さんのお話です。

凧ちゃんを女の子の輪の中に入れるきっかけを作るつもりだった彼女ですが、いつのまにかミコにとって凧ちゃんは一生の大親友に。

## 第一話 友達になるつヨ!

それは中学2年生の夏休みも半ばを過ぎようとした頃だった。

「美子<sup>みこ</sup>ー、安藤<sup>あんどう</sup>さんから電話ー!」

その日

アタシが部屋で夏休みの宿題をしていると、ドアの向こうで兄の茂が声をかけてきた。

「ウン、こつちにまわしてー。」

アタシは兄に電話を部屋の子機にまわしてもらおうようお願いすると、ほどなくその子機がプルルル・・・と音を立てた。

「ハイ、アタシです。」

「あ、ミコ?」

「久美子ー、ひさしーネ。元気でやってる?」

アタシは藤本 美子、友達からは美をミと読んでミコと呼ばれることが多い。

そして今電話をかけてきたのは安藤<sup>あんどう</sup> 久美子<sup>くみこ</sup>といって、アタシが中1のときとても仲の良かった女の子の一人だ。

「じつはさあ、ミコにちょっとお願いがあるんだわあー。これからアンタんちに行ってもいいかな?」

いつもは小さいことをあまり気にしない久美子があるときはやけに真剣そうな口調だった。

「あ、ウン。いいヨ。アタシんちでいいの？どっかで待合わせしてもいいけど？」

「ウウン。アンタんちのほぅが都合がいいから。じゃあ、30分くらいでそつちに行くから。」

そう言つて久美子からの電話は切れた。

そして30分後

ほとんど正確に久美子はアタシんちを訪れてくる。

「ミコ、ひさしぶりー。新しいクラスはもう慣れた？」

「ウン。まあ、1年のとき一緒だった久保ちゃんも奈央も一緒だしさあ。あと、ほら、同じクラスだった井川さんも一緒なんだヨ。」

「あ、そうなんだあー。アタシ、井川さんってほとんど話したことなかったけど、あの娘ってミコとツートップのすっごい秀才だったもんネ？」

「アハハ。アタシのほぅが下だヨー。あの人って将来医者をめざしてるらしいから、やっぱ頭いいわ。」

そんな挨拶から始まつて久美子は途中で買ってきたらしい缶ジュースを1本アタシに渡してお菓子の袋を開いた。

「あ、サンキュー！」

アタシはプシュッと缶ジュースのプルトップを開け、そして一口喉を潤す。

「で？ さっき電話でなんか深刻そうな感じだったけど、アタシに頼みつて言つてたよネ？」

「ウン。じつはミコだから頼めることなんだけどね…。」  
「まあ、とにかく言ってみてヨ？ 久美子の頼みだったらなんとかしてあげたいって思うし。」

「じつはさあ…。 ミコのクラスに小谷 哲君っているでしょ？」

「ああ、ウン。いるネエ。なんか女の子みたくキレイな顔した人でしょ？ 今アタシの席の隣に座ってるヨ。」

「ウン、そうそう。あの子ってアタシの幼稚園からの幼馴染なんだから。」

「あ、そうなんだあー。それで、その子がどうしたの？ もしかしてアタシに愛のキューピット役でもお願いしたいとか？（笑）」  
「そんなんじゃないわヨ。 アタシってそういう趣味ないし。」  
「そういう趣味ってどんな趣味ヨ？（笑） アンタって前から中性的なビジュアル系のバンドとか大好きできゃあきゃあ言ってたじゃん？」

「ウン、そういう中性ビジュアル系ならいいけどね、あの子の場合は本物だから…。」

「本物ってなにが？」

すると久美子はアタシの前にずっと顔を近づけてきた。

「ミコ、とにかく驚かないでアタシの話をよく聞いてネ？」

「い、いいヨ…。 どうしたの？ そんな緊迫した顔しちゃって。」

「じつはさ、小谷君ね、あの子…じつは本物の女の子なんだわ。」

「ハアアアーーーーー!？」

アタシはとぼけたような声を上げてさらにこう続けた。

「なんか言ってることがよくわかんないけど、女の子っぽいのは同

感だけど、女の子そのものってこと？」

「ウン、そういうこと。」

「あ、もしかして、よく聞く性同一性なんかかっていう？ 身体が男だけど心が女って言ってるひとたちのこと？」

「ウン、そういうんじゃないヨ。ホントの女の子ってこと。アタシたちと同じ。」

そして久美子は小谷君が1週間ほど前の夜中に急な腹痛で病院に運ばれたこと、それは女性の生理であり、検査の結果彼の身体には子宮があつて染色体も女性のXXであつたことがわかつたということなどをアタシに話した。

「エ、つてことは、つまり小谷君は今まで男の子として育てられてきたけど、それは間違いでじつは女の子だつたってこと？」

「まあ、ストレートに言えばそういうことだネ。」

「びつくりしたあー！へえー、そういうことつてあるんだネエ。」

まあ、でもそう言われてみればたしかにあの人の雰囲気つて異性つていうより同性っぽい感じするしねー。」

「ウン。アタシも彼は幼稚園からずっと知つてたしね。 哲ちゃんつて話し方も態度もちゃんと男の子なんだけど、どっか女の子のオラみたいのをずっと感じたんだよね。」

「そっかあ。じゃあ、小谷君は女の子として生活するようになるわけ？」

「ウン。そういうことで決めたらしいヨ。」

「でもさあ、学校とかってどうするの？ まさか今の学校にそのまま通い続けるってわけにはいかないでしょ？」

「ウン。哲ちゃんは今の学校に通つて卒業したいって。」

「エエエーッ！ でもそれじゃ周りの人たちきつとすごい驚くんじゃない？」

「だろうネ。 それでさ、 ミコにお願いがあるんだ。」

「なにヨ？」

「彼…ってというか彼女の友達になってやってくれないかなあ？」

「エーッ！ アタシが？」

「ウン。 ダメ？」

「ダメ…っていうんじゃないけど…。」

「もしアタシが同じクラスだったら良かったんだけどさ。 でも哲ちゃんと同じクラスでこんなこと頼めるのってミコしかないんだヨ」。

久美子はウルウルとした目でアタシのことを見る。

（ウン…、 たしかにあの人って嫌な人とはぜんぜん思わないけど、アタシって、席が隣なのにほとんど話とかしたことってなかったよなあ…。）

でもこんなに真剣な久美子って今までほとんど見たことなかった。

中1のときはアタシらって冗談ばかり言い合って、気を使わないで付き合ってきたし。

まあ、アタシが友達になって、それから女同士の輪みたいのに入れてやれば…。

「ウン。 わかった！ じゃあ、アタシ、彼、じゃなかった彼女の友達になってみるヨ。」

そしてアタシは久美子にそう返事をしたのだった。



## 第二話 きっかけ

夏休みが終わって数日後

いよいよ今日小谷君、あ、違った！小谷さんが女の子として登校してくる。

クラスはそのこととにかくざわついていた。

どちらかというと、女の子は意外と冷静にその事実を受け止め始めている様子。

しかし男の子たちは今まで彼女を『哲ちゃん』と呼び一緒に遊んできたわけで、どこか割り切れていない雰囲気を感じる。

とくに彼女と仲が良かった安田君や工藤君なんかは朝からずっと落ち着かない雰囲気だった。

朝のHR開始時間になってもまだ担任の山岸先生は教室に現れない。そして5分ほど遅れてガラツと教室の扉が開き山岸先生は入ってきた。

教室の中はシーンと静まり返る。

先生の隣にいるのはアタシたちと同じ女子の制服を身に付け、ショートボブの髪形をして目のクリツとした可愛らしい感じの女の子。

(エ、あれ…小谷君？)

どこからどう見ても女の子にしか見えない。

彼女は下を向いて顔を真っ赤にし、スカートから覗く細く白い足は小刻みに震えていた。

先生はクルツと黒板の方に向きを変え白いチョークを摘んで大きな字で『小谷 凜』と書き

「これが新しい小谷さんの名前です。『りん』さんと読みます。」  
と言い、そしてアタシたちに今までの経緯を簡単に説明した。

「小谷さんは生物学的に本当は女性です。みんなにはこのことを理解してほしいの。」

最後に先生がそう言ったとき、クラス委員の井川さんがスツと立ち上がって

「小谷さん、席に座ろう?」  
と声をかける。

そして、小谷さんはその言葉にホツとしたような表情を浮かべてアタシの隣にある自分の席に腰を下ろした。

それから、そのまま1時間目の山岸先生の英語の授業が始まる。  
授業中アタシは隣の席に座る彼女の横顔にフツと目をやった。

紺のジャンパースカートの上に着たボレロから見える肩は小さくて  
優しい曲線を描き

そして少し茶色っぽい亜麻色の髪の毛  
ふっくらしたピンク色の頬とプクンとして柔らかそうな小さ目の唇  
つるんとした形の良いおでこ

女の子らしい優しい目元。

きっと基本的には夏休み前に小谷君だったときの身体なんだろうけど、  
こうして女の子として意識してしまうともう男の子として生活

していたときの面影はあまり感じないように思える。

(なんか、すごく可愛いんですけど…。)

それにしても、こうして今まで男の子だって思っていた人がある日突然女の子の制服を着て自分の隣に座っているのはすごく不思議な感覚だった。

みんなが座っている席を前から見ていくと女子の列の隣に男子の列、そしてその隣はまた女子の列というようになっていて、だから横列は男と女が必ず隣り合わせて座っている。

その中で男子の一行に紅一点で座っている彼女の姿はやっぱり違和感を感じてしまう。

英語の授業が終り2時間目の社会の授業が始まるまでの10分休み

アタシは隣に座る彼女に意を決してこう話しかけた。

「ね、『凜』でいいよね？」

彼女はアタシに

「うん、もちろん！」

と言ってニコツと微笑む。

(わあ、ホント可愛いやあー！)

アタシの差し出した手を握り返してくれた。

そして、白くてとても柔らかい彼女の手を握ったとき、アタシは心の中で何かビビッとくるものを感じてしまったのだった。

しばらくの間、彼女は女の子の言葉遣いにまだ戸惑っている様子だった。

簡単なところでは主語の「アタシ」か「わたし」。  
注意しててもときどきは「ボク」という単語がでてきてしまう。

ただアタシは

「そんなに意識しすぎてもしようがないヨ。」  
と凜にアドバイスをしたりした。

「まあオレはさすがにまずいけど、女の子でボクってけっこう可愛かったりするじゃん（笑）」

女の子たちの中にいればきっとそのうち無意識で女言葉になっちゃうんじゃないかな。」

凜はそんなアタシのアドバイスを謙虚に受け入れていたようだった。

女の子として学校に通学を始めて半月ほどが経ち、身体の状態も安定してきたことから彼女も体育の授業に参加するようになった。後で凜に聞いたことだけど、これは初め学校にとっても彼女自身にとっても少し心配をしていた点だったらしい。

体育の授業は体操着でやるわけで、当然男女別々に分かれてそのための着替えをすることになる。

今まで男子として意識していた人が女の子として他の女子たちに混ざって同じ部屋で着替えをする。

そのときの周りの女子の反応、そして何より凜自身の気持が最初は少し複雑なものがあつたような気がする。

それでもアタシの周りの女の子たちに、凜に対して意識して自分の身体を隠そうとする娘は一人もいなかったように思う。どちらかと

いとうと凜のほうで、恥かしがって隠してしまう。

「女同士なんだから別に見たってかまわないヨ。アタシは凜にこんなことを言った。」

すると彼女は意外にも他の娘たちの裸を見ることに大した気持はない。逆に自分の身体を見られるほうが恥ずかしいということをやっていた。

それはもしかしたら、遅ればせながら女性の人生を歩むことになった彼女が、他の女子の身体の発育状況と自分のそれとの間に多少のギャップを感じていた生かもしれないと思った。

それでも彼女はそのうち彼女自身そういう感情をあまり意識しなくなっていた。

それは彼女に3回目の生理がきた頃からだだったらしい。アタシは、それはやっぱりアタシたちと彼女との間の絶対的な共通点である女性の生理という存在が、彼女にとって自分が周りと同じ女の身体であるということを否応なく意識させてしまったのだろうって思った。

2年生の終わりごろ

男女に分かれて「心と身体の教育」というのが行われたことがあった。

当然凜もアタシたち女子の中に混ざって話を聞いていた。

その授業の講師として来たのは、大正大学産婦人科の女医の先生。その先生はアタシたちにこんな話をしてくれた。

「もし世の中が男性だけ、もしくは女性だけで子孫を残せるとした

らどうなっていたと思いますか？」

この問に対する女の子たちの反応はそれぞれだったが

「同じ女だけだったら戦争とかなくてきつとすごく繁栄した世の中だったんじゃないかって思います。」

という答えが何人かいた。

それに対しその先生はこう言った。

「もしかしたら、そうかもしれないわネ。でもアタシは多分人間は成長する前に滅んでいたんじゃないかって思うの。なぜかっていうと、価値観が同じものだけであることは成長を生み出す刺激がないから。人間ってというのは考えながら、悩みながら成長していくものだから。男と女はやっぱり根底にある価値観が違うでしょ？だからお互い理解し合おうとする。そしてその理解し合おうとする気が愛じゃないかってアタシは思うの。だからアナタたち女の子には、男の子という存在を遠ざけようとするんじゃないく理解しようとする努力を是非して欲しいと思います。」

その先生は男性と女性の価値観の違いを積極的に認めること、そしてそれを理解する努力をアタシたちに話してくれた。

そのときフツと、アタシの横にいる凜の表情を見ると、彼女はとても真剣そうな顔でその先生の話聞いていた。

それはきつと、ある日突然価値観の変更を迫られた彼女にとってこれから先の人生を歩いていくために一番大切なことだって思ったのかも知れない。

女の子の付き合いは気の合ったグループ単位で行動することが多い。アタシは、クラスの中で久保ちゃんや奈央といった1年のとき仲が

良かった娘たちと2年になってもそのままグループを作っていた。  
そしてそこに凜が混ざった。

最初はわりと遠慮がちだった彼女は、次第に自分からも積極的にアタシたちに話題を振ってくるようになった。それは彼女が女の子のことを無理に勉強してきたものではなく、どちらかっていうと男女の枠を超えて素直に感じたものを表現しているように思えた。このときアタシは久美子に頼まれたからではなく、一人の人間としての凜に興味を持ったような気がする。

アタシは凜の考えることというのは、すごくピュアで透明感のあるように思えた。

そう、彼女は人間としてすごく純粹でまっすぐな気持を持っているように感じたんだ。

アタシは次第にお互い話をしていなくても、たとえ別々のことをしているても、自分の横に彼女がいることが心地良いような気持になっていった。

そしてアタシは自然と凜と一緒にいる時間が増えていった。

### 第三話 出会いはキャンパスの中だった

中3になりアタシと凜はさらに仲が良くなっていく。

日頃は、それまで同じグループで仲が良かった久保ちゃんや奈央も含めて行動していたけど、アタシと凜はそのうち休みの日も一緒に時間を過すことが多くなった。

今年はいよいよ受験生、そのため日曜日には2人で一緒に図書館で勉強をして帰りにはお気に入りのお店のクレープ屋さんで生クリームたっぷりのクレープを頬張っておしゃべりに花を咲かせていた。

そして3年生になって少し経った頃、  
凜にとって運命的な一人の男の子が現れる。

彼は石川 渉君といって関西から転校してきた人だった。  
凜は次第にこの彼に心を惹かれていった。

彼は女心をくすぐるような、どこか小学生の少年っぽさを残した男の子だった。  
一見すると暖簾に腕押しのようなひょうひょうとした性格で、まっすぐでピュアな凜の性格を上手く操ってしまう。だから凜も彼に対してどう対応したらいいのか、最初は戸惑っている気持ちがあったらしい。

そしてこのワタル君と凜の心は3年生のはじめにみんなで行ったデイズニールランドでお互い重なり合っていく。



凜は女性として生活をするようになって、それまで異性であったはずの女の子を同性として意識するよう努力してきた。

しかしワタル君を異性であると意識するようになるのには不思議とそういう努力をする必要はなかった。きっと凜はそのとき本能的に自分の中の女性を受け入れていったんじゃないだろうか。

そして2人は自然に惹かれあっていたんだと思う。

3年生の夏休みが終りに近づく頃

凜とワタル君は初めて2人きりの初デートをすることになった。

場所は都内のプール

凜はこのとき初めて女の子としての水着デビューを果たすことになった。

ただ彼女はこの水着デビューをするにあたっては最初自分なりに計画があるらしかった。

初めに女の子同士でその後慣れてきたら男の子も混ぜて、なんてことを彼女は考えていたらしい。

ところがこのワタル君とのプールデートの約束でそうしたホップ・ステップを通り越していつきに最大加速のジャンプをすることになってしまった。

「どーしようおおー！！」

彼女はかなり戸惑っていた。

そしてそのデートの日の数日前

彼女はアタシに電話をかけてきて、アタシはこんな相談を受けた。

「ねえ、ミコオ。アタシさあ、水着なんか着てもヘンじゃないかなあ？」

「ヘンって？　なんか凧の言ってることの意味がよくわかんないけど。」

彼女は少し躊躇ってこう言った。

「だからさあ、似合わないっていうか…。」

「ウーン、似合うか似合わないかっていうのは人それぞれの感じ方があるからよくわかんないけど、でもさあ。」

「でも？」

「男の子ってさ、女の子の水着姿とか見たらやっぱりどうしてもエッチな想像とかしちゃうじゃん？」

「まあ…だろうネ。」

「だから石川君も凧の水着姿見たらきつとそういうのは想像しちゃうんじゃないかな。」

「エ、そうなのかなあ？」

「アタシはそう思うヨ。だって、それは彼は男で凧は女なんだもん。アンタはそういうところで自信をちゃんと持ったほうがいいヨ。」

それにせっかく水着姿になって男の子に何も意識されないんじゃないかな寂しいじゃん。」

「そうだねー。」

そして結局アタシは凧の水着選びにも付き合うことになった。

この頃では体育の着替えのときなどお互い何の意識もなく裸を見合っていたけど、可愛い水着を身に付けた凧の身体は思ってたよりもずっと女性らしい体型になっていた。

彼女は3年生になった頃には生理の時期も安定し、そしてそれまで多少中性的な体つきもこの時期から急に女性らしく柔らかな丸みを帯びていく。

中3の初めにはブラジャーもつけるようになり、腰のラインもくびれと丸みがハッキリしてきた。

そんな身体の急激な変化に彼女自身も少し戸惑いを感じているようではあったけど、そうした身体の変化は心の変化にも少しずつ影響を与えていったように見える。

そんなアタシと凜は高校受験で同じ目標を持つことになった。

彼女をけしかけたのはアタシだった。

アタシは小さい頃から青葉学院にずっと憧れを持っていて、じつは中学受験で青葉学院の中等部を受験したけどあっけなく不合格。それで高校受験ではなんとしてもこの学校に合格つもりで1年生のときから一生懸命勉強してきた。

哲君だった頃の凜はけっして成績は悪いほうではなかった。

クラスで10番くらい、学年だと50番くらいだろうか。

ただ青葉の合格レベルはかなり高く、特に女子では偏差値70以上が最低の可能性だった。

アタシは、安易に凜に同じ学校の受験を勧めてしまっただけで最初少し後悔した気持もあったけど、まっすぐな凜の性格を見ると彼女にとって必ずしも無理な希望ではないような気がしていた。

実際目標を持って本気で勉強を始めた彼女の成績はみるみるうちに上昇をし始めた。

そして2学期には彼女の偏差値は70ラインを超え合格の光が見え始めてきた。

そして

この頃、アタシはある一人の男性に小さな恋心を抱き始めてた。カレの名前は芦田さんといって、凜が中2のとき初めての生理で病院に入院したとき同室だった人だった。

アタシたちの初めての出会いは、中3になってすぐの頃アタシと凜が青葉学院のキャンパスをはじめて見学で訪れたときだった。

高等部の正門がわからず青葉通りに面した大学の大きな正門のところでウロウロとしていたアタシと凜。

そこにたまたまキャンパスから出てきた当時青葉大1年生のカレとすれ違った。

アタシにとってのカレの第一印象は、ドキッ！という気持ち。

これを他の言葉で表現することはできそうにない。

凜と一緒にいるアタシに

「はじめまして。芦田っていいいます。」と言ってニコツと微笑んだあの笑顔。

5歳も年上の大学生のカレだったけど  
素直な気持で

(カ、カワイイー！)  
って思っちゃったんだ。

何がカワイイのかって言われると説明しようがないけど、14年間の人生の中で初めて胸が本当に締め付けられるみたい。キーンって（笑）

そしてアタシは半分無理にお願いしちゃってカレにキャンパスの中を案内してもらった。

そのときカレに奢ってもらった学食のソフトクリーム。

これはもう絶対に忘れられない美味しさ！

舐めると少なくなっていくクリームを見ながら

ああ、このままずっと減らなければいいのにーってさえ思った。

そして帰りの電車の中ではつい凜に

「大学生から見たら…中学生なんて問題外なのかなあ？」  
なんて呟いてしまったアタシ…。

だって5歳差っていったら、アタシが高校生のときカレは大学生。

そしてアタシが大学生になるとカレは卒業しちゃうし。

どこでもどうやってても重ならないから…。

でも凜は意外にあっさりこう応えてくれた。

「でもさあ、アタシたちが大学1年で18歳になったら23歳じゃん？ それくらいの年の差で恋人同士ってけっこういると思うよ。」

そうか！

中学生と大学生って考えるからすごく離れているように思ったけど、でも

年齢が上にあがっていけば5歳差ってけっこうありなんだよね！  
ものは考えようかもしれない。

そして凜はそんなアタシの心の中に芽生えたかすかな恋心を知つて  
か知らずか  
アタシの肩を枕代わりにしてコクコクとうたた寝を始めたのであつ  
た。

## 第四話 2人の学園祭

中3

秋風が吹き、その中に冬の香りが少し混じり始めた頃

アタシと凜は、青葉学院大学の学園祭に出かけた。

もし青葉学院高等部に入学できたらやっぱり将来は青葉学院大学に進学したい。

勉強へのファイトを少しでも掻き立てるため、でもアタシにとってはそれは半分口実みたいなもので、じつは後の半分は青葉大にいる芦田さんに会いたかったからだった。

その頃、アタシは芦田さんと携帯電話の番号を交換してときどき電話で話をするようになっていた。

とはいっても、ほとんどかけるのはアタシの方からで、そのたびに口実を練っていた。

「英語の問題のここがわからないの。」

「芦田さんが高校受験したときどういう勉強してたの？」

「青葉学院大学のこと聞かせて？」

そんな口実も何回も繰り返すうちに段々ネタ切れにもなってくる。

それでも、カレはアタシからの電話に時間をかけて丁寧にゆっくり応えてくれた。

そしてある日の電話でカレは

「そういえば、もうすぐウチの大学も学園祭のシーズンだなあ。」  
と話してくれた。

「大学の学園祭ってその大学の学生じゃない人も来ていいんですか？」

「もちろんさ。むしろ外部の人の方がずっと多いくらいだよ。」

「大学生じゃない人も？」

「ああ、青葉大を目指す高校生とか、あと中学生だってたくさん来てるよ。」

（ああ、なんてチャンスッ！）

気がついたらアタシは受話器に向かってごうごう叫んでいた。

「ア、アタシも行きたいー！。」

すると

芦田さんは優しい声で

「来るかい？」と言ってくれた。

「いいんですか？」

「もちろん。よかったら凛ちゃんも誘っておいでよ。」

（あ、やっぱり凛も一緒なのね…。）

少し寂しい気持になったけど

でも、久しぶりに生芦田さんに会えるチャンスなんだもん！

「あの…。」

「ウン、なにかな？」

「もしアタシたちが行ったら芦田さん一緒に案内してくれますか？」

ダメ…かなあ。

なんて返事されるか心臓がドキンドキン…。



「ああ、オレでよかつたらいいヨ。」  
「わぁーいー!」

そして当日

1ヶ月ぶりに会った芦田さんの姿

「やあ、ひさしぶり。」

カレは

少し跳ねている頭の後ろの癖ツ毛

そしてかなり穿き古している感じのジーンズと茶色のセーター

(やぁん、カワイイー!)

「じつはオレの入ってる『旅の会』も店を出しているんだヨ。ま  
ずそこから行ってみるよう。」

そう言うと芦田さんは正門から続く银杏並木をまっすぐ歩いて突き  
当たりのロータリーに並んでいる一軒の屋台に連れてってくれた。

「よお、売上どうだ？」

「まあまあだな。アレ？ 芦田の妹さん？ でもオマエって妹い  
たっけ？」

屋台でお好み焼きを焼いている芦田さんの友達の子の人がアタシと  
凜を見てそう言った。

「いや、オレのガールフレンドたち。」

「エ、まじ!? でもすごく若そうに見えるけど…」

「そうさ、だつて中3だもん。」

「オイオイ、それって危なくねーか? (笑)」

「アハハハ。じつは前に入院したとき病院で知り合った娘とその友達なんだヨ (笑)」

「あ、そうなんだー。やあ、はじめまして。コイツのサークル仲間です。」

「こんにちわ。藤本 美子です。」

「小谷 凜です。」

「2人も今度青葉の高等部を受けるんだ。」

「そうなんだー! じゃあ、将来は青葉大に進学?」

「あ、ハイ。できたら。」

「じゃあ、そのときはぜひこの『旅の会』に入ってマスコットガールに!」

「アハハハ。」

すると

そのとき女の人が2人アタシたちのところに寄ってきた。

「あら、高坊。今日は当番だったっけ?」

そのうちの一人

髪の毛の長い、赤いルージュを唇に引いたとてもキレイな女の人が芦田さんに話しかけてきた。

「いや、今日はみんなに任せるヨ。今日は知り合いの女の子の案内役で来たんだ。」

「わあ、カワイイ娘たちー。こんにちわー。」

そう言つてそのキレイな女の方はアタシたちの方を向いて挨拶した。

何か仲良さそう…。

芦田さんと同じ学年の人かな。

いいな…。いつも一緒にいれて。

なんかすごくキレイな人だし…。

薄いブルーのブラウスに黒のタイトスカートが大人っぽいな。

ああ、何かアタシちよつとジェラシーかも。

嫌な顔になつてないかな…。

その後いろいろなお店を回り、ときどき校舎の中に入つては音楽サークルのライブとかも覗いてみる。

どれを見てもやっぱり大学の学園祭は中学の文化祭なんかぜんぜん比較にならないくらいスゴイパワー！

お昼が近くなりアタシたちは学食へ行つてみた。

お昼ごはんは学食で芦田さんがご馳走してくれた。

「さあ、何でも好きなものを選んでいいヨ。とはいつても学食だ

からどれも安いけど（笑）」

「わぁー、メニューがこんなにたくさんー。」

「あ、ミコ。コレ美味しそう！でも、これもいいな…。ああ、迷つちゃうなあー。」

いろいろ迷つた結果、アタシはハンバーグランチ、凜はかにクリームコロッケ、そして芦田さんは青葉物語を選んだ。

「おいしー！ 学食のご飯ってもっと大雑把な味なのかって思ったら、お店のみたいに美味しいー。」  
アタシも凜も大きな大学の学食に大はしゃぎしながらご飯を食べた。

ご飯が終わると、凜が急にキャンパスの中に建っている間澤記念館の前で写真を撮りたいと言いだした。  
いつもはあまり強引な主張をしない凜にしてはやけに熱心そうにそこに行きたがるのが少し不思議だった。

「よし、じゃあ行ってみよう！」  
そして芦田さんの鶴の一声で3人でそこに行くことを決定。

間澤記念館は青葉学院の象徴的な建物で、学校案内などの記事でもこの建物の写真がよく載っている。  
古いギリシア風の円柱が特徴的で、初めて青葉キャンパスに来たときアタシもとてもステキな建物だと思っていた。

そしてアタシたちがその建物の入口で写真を撮ろうとしたとき  
「あれ！ 凜ちゃん？ おおっ、藤本さんもおるやないか！ どないしたん？」

アタシたちがその声の方向を向くと  
びっくりしたことにそこには同じクラスの石川ワタル君がいたのだ  
った。

「ワタル君、どーしたの！？ びっくり！」  
その姿にアタシが驚いて声をあげると

彼は

「びっくりはこっちも同じやで。ボクは青葉の見学に来たんや。ボクもこの高等部受験するやしな。」

そのときアタシはピーンときた。

(そっか…。凜めえ、仕組んだなー。)

すると凜は

「エー！ でもワタル君も来てるなんてホントびっくりしたよお！  
といかにも偶然の出会いのような言い方。」

(うわっ、しらじらしいー！(笑))

そして彼女はこう続けた。

「あ、ネエ！せっかくだしさあ、大勢で動くより2人ずつに分かれて行動しない？ アタシ、ワタル君と見ていくから、ミコは芦田さんと2人で。ネ、芦田さん。いいでしょ？」

「エ、ボクはいいけど…。ミコちゃんはせっかく凜ちゃんと来たのに、いいの？」

(ハイ！ モチロン！ やったー！芦田さんとツーショットだぁーい！)

しかしさすがに声に出しては言えず  
アタシは必死に目でその気持を訴えた。

「ウン。じゃあ、そうしようか。」

芦田さんは笑顔でそう答えた。

「じゃあ、決まりネ！ それで後はフリータイムってことで。 芦

田さん、ミロのことヨロシクお願いします。」

「ウン、オツケー。じゃあ、もしなんかあったら携帯にかけて？」  
そう言って2組のカップルはそれぞれ別行動となったのであった。

凜、アリガトー！

ああ、なんてハッピーデー！

2人の学園祭、ブラボー！

## 第五話

4月

アタシと凜そして石川ワタル君の3人は晴れて青葉学院高等部に入学することができた。

そしてアタシと凜はなんとまた同じクラスになることになった！

この頃凜とワタル君はお互いの気持を確かめ合いお付き合いを始めたようだった。

そしてアタシたちは、同じクラスの中で知り合った佐倉 美由紀ちゃんという新しい仲間を加えて行動を共にしていく。

みーちゃんこと美由紀ちゃんは、お母さんがイギリス人と日本人のハーフ、つまり本人はクォーターということになるらしい。

そのためか、少し目の色が茶色で髪の色も茶色がかっていて、肌の色は白くまるで人形のように美しい娘だった。

入学式の日の教室ではじめて会ったときは、教室の中で何人もの男の子たちが振り返って彼女を見ていた。

ただし

彼女の性格はその外見とはかけ離れていて、かなり破天荒であけっぴろげ（笑）

そのためアタシたちは何も装うことなくすぐに仲良くなっていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3380z/>

---

永遠のメリーゴーランド（ミコと芦田さんの場合）

2011年12月13日01時52分発行